

明日の 東洋学

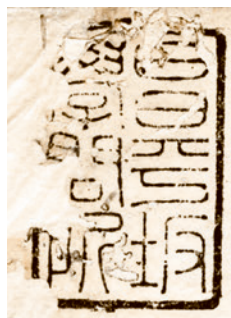
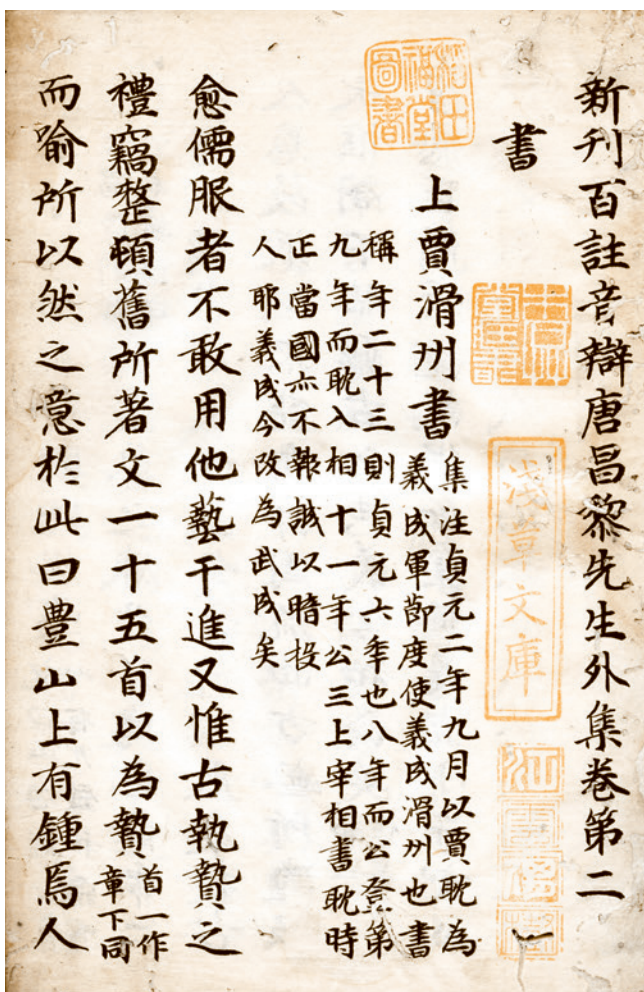
Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

共同利用・共同研究拠点
共同研究課題の研究成果特集 第3号

禅律寺院における宋式「首楞嚴呪」「施餓鬼」儀礼
西谷 功

日本所在漢籍に見える東アジア典籍流传の歴史的研究
―宮内庁書陵部蔵漢籍の伝来調査を中心として―
高橋 智

『広島大学文学部舊藏漢籍目録』の刊行
赤迫 照子



はじめに

東洋学研究情報センターは、平成 21 年 6 月に文部科学大臣によって共同利用・共同研究拠点に認定され、平成 22 年度から全国の関連研究者コミュニティに対し、より開かれたセンターとしても活動を開始しました。センター

ではアジア研究・情報開発拠点として行うにふさわしい共同研究課題を募集しています。「明日の東洋学」No.30、No.32 に続き、今回も採択された 3 課題について、成果のご紹介をさせていただきます。

禅律寺院における宋式「首楞嚴呪」「施餓鬼」儀礼

西谷 功

採択課題：中世寺院における宋代仏教文化受容の統合的研究－泉涌寺流を中心とした宋代仏教の相対化への試み（H26～H27）

申請者 宗教法人御寺泉涌寺宝物館「心照殿」
学芸員 西谷 功

はじめに－本研究の視座

現在、平成 26・27 年度の予定で「中世寺院における宋代仏教文化受容の統合的研究－泉涌寺流を中心とした宋代仏教の相対化への試み」と題した共同研究を行っている。

自明のことだが、古今東西、有名無名を問わず、僧侶たちは「悟り」を得るために寺院で集団生活を行いながら、仏道を修していた。しかし、従来の研究では、資料不足もあいまって、寺院という〈場〉、そこでの「僧侶の日常的な寺院生活」を視野に入れた研究は限られている。

寺院での集団生活を円滑に行うために規定されたものが、「律」や「清規」である。さらには、個別に「寺法」という各寺院で特定の「決め事」も定められた（以下、これらを総称して〈規則〉とする）。僧侶たちは、こうした〈規則〉を遵守して修行生活を行っていた。

〈規則〉には、集団生活での禁止事項のほかに、役割分担（僧制）や作法（所作）、一日の修行や生活の在り方、布薩などの月々の儀礼、仏誕会・安居・自恣・施餓鬼・涅槃会などの年課儀礼の次第——その儀礼で使用する仏具、仏像仏画の規定も含まれる——などのさまざまな事柄が記される。寺院社会で「悟り」を得るために行われた修行、思想、芸術活動などは、こうした〈規則〉に準拠したうえで実践されていたことを忘れてはならない。

本研究はこうした視座をもって、中世日本——主に鎌倉時代——の寺院社会において、入宋僧が請来した宋代仏教の思想や〈規則〉、それにとまなう儀礼、文化、文物などの受容過程を、従来の宗派史や顕密仏教論といった史観から開放し、当該期の東アジア仏教の視座から関連資料を蒐集することで再解釈を行い、鎌倉時代の寺院史研究に対する新たな宗教史的、美術史的、文化史的意義の統合的構築を試みようとするものである。あらゆる史観にとらわれな

い、人的交流、文物や思想の「往来」を検討し、寺院社会の重層的かつ複雑な「姿」をありのままに提示したいと考えている。

その基点寺院を、入宋僧の我^が禅^{ぜん}房^{ぼう}俊^{しゅん}苧^{じょう}（1166-1227）が開いた泉涌寺（1226 年創建、京都市）とした。従来、「入宋」をキーワードにした鎌倉仏教研究のなかでも、俊苧や泉涌寺の研究がほとんど行われていなかったこともあるが、近年、泉涌寺および関連寺院で実践された〈規則〉を収めた『南山北義見聞私記』（以下、『私記』と略称）の発見により、泉涌寺でも日本の禅宗寺院と同様に、南宋仏教の寺院制度、出家生活の作法・諸儀礼などを興行していたことが明らかとなったからである。とりわけ、俊苧やその門弟たちが参学した律院・景福寺（現在の浙江省寧波市）の〈規則〉が直接受容され、俊苧請来の釈迦三尊・羅漢・祖師などの仏画が、泉涌寺で興行された安居や礼文などの宋式儀礼で、堂内に懸用されていたことが判明したのである。

ここで留意すべき視座として、律院＝景福寺で興行された月課年課儀礼の多くが、南宋江南地域の禅律教の各寺院でも興行されていたという点である。当時、国家統制下で、僧侶たちは宗派や法流に偏重しない寺院制度（十方寺院制）に準じて、寺院間を流動的に移動し、参学が可能となっていた。こうした僧侶は「雲水」「行遊（僧）」などと称され、禅教律院を往来し、法流にとらわれずに諸師のもとで修行をした。入宋僧の諸寺院参学を可能にしたのも、こうした制度によるところがたつよく、南宋・日本・高麗の雲水たちによる諸寺院への活発な遊学にとまなう、彼らを受け入れる禅教律院の〈規則〉がある程度共有化されていく時代であった。

宋地寺院の〈規則〉の一部を視覚化したものが、「羅漢図」や「五山十刹図」である。とりわけ、大徳寺伝来の「五百

羅漢図」（100幅）は南宋淳熙年間（1178-88）、榮西や俊芺、道元といった入宋僧たちが参学した阿育王寺や天童寺近郊の東銭湖（現、寧波市東方）周辺で制作されたもので、入宋僧らが、「五百羅漢図」に描写された寺院生活や〈規則〉をまさに体験し、そうした〈規則〉や文化を請来した点は注目してよい。「羅漢図」に描かれた仏教の様相が、入宋僧を介して、鎌倉時代の禅律寺院に展開したとみなせるようになったのである。

本研究はこうした視角のもと、禅律僧によって請来された宋代仏教の〈規則〉や文化、芸術活動を寺院という〈場〉において統合的に考察するもので、今回は、その成果の一端を報告する。

宋式「首楞嚴神呪」儀礼—泉涌寺の開山忌

俊芺が定めた〈規則〉書「清衆規式」（1215年成立）によれば、三学（戒定慧）に準じて衆僧が行うべき一日の「学行」に、「聴学」や「打集」、「坐禅」のほかに、晨朝の「修懺」（略戒大悲懺法）、正午の「諷誦」（安樂行品、楞嚴呪）、黄昏の「誦念」（弥陀経、舍利講）が義務づけられていた。こうした懺法儀礼や經典・神呪の諷誦、暗誦は、入宋僧が江南地域の諸寺院で体験したもので、中国語の発音「宋音」で読誦した¹⁾。

「宋音」での懺法や經典読誦の儀礼が、修正会（金光明懺法）、開山忌（首楞嚴呪）、結界諷経（阿弥陀懺法）などの各儀礼のなかに伝承され、現在、泉涌寺でしか興行されていない貴重な宋式儀礼も多い。

ここでは、その一例として、「首楞嚴神呪」を用いた儀礼——開山俊芺の遺徳を偲び、報恩を宣言する「開山忌」——を取り上げる。「首楞嚴呪」の陀羅尼は、修行を妨げる障害を取り除くものとされ、こうした理解のもと、泉涌寺で毎日読誦されていたのだろう。図1は、俊芺像に対し礼拝、奠供、茶礼する長老、その左右で経文を諷誦する4名の役職僧（両班僧）、長老に従う2名の侍者である。こうした僧侶の構成は、上述の「五百羅漢図」中「禪定羅漢の供養」「戦没者供養」「貴女の礼拝」（画題は『大徳寺伝来五百羅漢図』、思文閣出版、2014年による）などの供養や儀礼を行う羅漢たちの配置と共通するといえ、宋式儀礼に準拠した所作とみなしてよからう。

さて、長老の一連の所作後に、「首楞嚴神呪」が読誦される。読誦中の衆僧たちは列をなして堂内を行道（唐折）する（図2）。現行の所作や行道は、読誦経文を異にするが、『私記』『諸祖忌諷経章第十七』の内容と一致することから、儀礼は鎌倉時代から大きな変更はないものとみられ、それ



図1 泉涌寺開山忌（礼拝、奠供、茶礼）



図2 泉涌寺開山忌（行道）

は、南宋律院の儀礼が今なお泉涌寺で興行されていることを意味する。

ここで注目したいのが、当該期の教院（天台、華嚴宗など）、禅院（禅宗）の首楞嚴呪儀礼の興行の有無である。教院では、北宋の華嚴僧・浄源「首楞嚴壇場修證儀」の儀礼が興行され、一方の禅院では「楞嚴会」としてさまざまな清規に伺え、渡来僧・蘭溪道隆入寺の建長寺（鎌倉市）でも開山忌で修されている。つまり、南宋の禅教律院で通用の儀礼だったわけである。

1) 泉涌寺の現存典籍のいくつかに、宋音ルビが付されている。また、本共同研究による東向観音寺（京都市）の調査で、「東山泉涌寺修懺殿／毎晨朝往生浄土修證儀是也」「四明浄覚師述」の宋音『千手懺法』（江戸書写）を確認している。

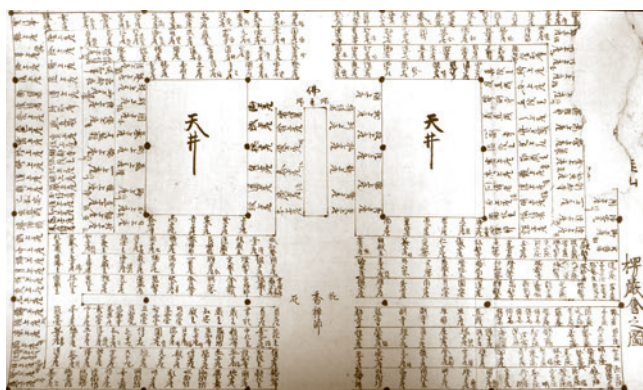


図3 『五山十刹図』下「楞嚴会之図」、大乘寺蔵

宋地寺院の首楞嚴呪儀礼の一実態に、行道する衆僧の始点を示す、大乘寺本『五山十刹図』²⁾収載の径山萬寿禪寺「楞嚴会之図」(図3)がある。萬寿寺(浙江省杭州市)は、俊芿や円爾(東福寺開山)らが参学した寺院でもあるが、この衆僧500名中(一部紙損により総数不明)に「□觀上座」「□西上座」等5名ほどの「日本」僧の参集が認められる。

また、泉涌寺僧の真観房思順は、入宋して、禪院・靈隱寺(浙江省杭州市)住持の北磻居簡(1164-1246)の侍者を務めている(『北磻詩集』卷八「贈日本国僧順侍者」)。

こうした日本僧の法会出仕や侍者などの事例からも理解されるように、入宋僧の多くは、寺院におもむいて、思想の修学や坐禅ばかりに邁進したのではなく、寺院の〈規則〉に準じて、宗教的实践を行っていたことが理解されよう。

宋式「施餓鬼」儀礼の受容

僧侶たちは毎月二度「入浴」し、自身の罪障を告白する「布薩」儀礼を行うことで、心身の清浄性を維持した。それを維持・増幅するもっとも大事な期間が「安居」(4月16日～7月15日)である。僧侶は结界を設け、寺院から一歩も外へ出ず、〈規則〉を遵守しつつ、集中的に聴学や修行、坐禅などを実践する。最終日には、この期間の罪障を告白する「自恣」儀礼によって、一年で最も清浄な心身を獲得し、その身体で、在俗信者に対する回向儀礼「施餓鬼(盂蘭盆)」を行う。

図4は、京博本『餓鬼草紙』(12世紀後半)で、僧侶が、台上の食事を餓鬼に与える場面を描く。従来、施餓鬼は空海が請来したというが、儀礼内容は不明である。注目すべきは、椅子に坐る老僧である。当時の天皇や貴族、法然や親鸞などの祖師肖像が畳に坐すのと好対照に、南宋仏教の〈規則〉を導入した禅律僧、一部の浄土僧の肖像は椅子に坐す。椅子文化は土間や^{せんじき}傳敷の住まい環境(=宋式伽藍)の導入と連動しており、したがって、椅子を用いる儀礼の多くが、宋代仏教儀礼を暗示する。図4の僧侶たちの所作は、岩座であるものの「五百羅漢図」中の「施飯餓鬼」(図5)と近似するところから、宋本を参照して描かれたのだろう。

こうした宋式施餓鬼が、泉涌寺でも興行された。次第や所作は、北宋天台僧の孤山智圓作・同律僧の元照重修『蘭盆供礼文儀』という儀礼書に基づき、宋音「焼香偈」「散華偈」「^{イウランフンケン}勸請詞」「^{シゴキハ}讚嘆偈」や「盂蘭盆経」「施餓鬼法」などが読誦された。南宋禅院の施餓鬼儀礼の詳細は不明だが、教律



図4 施餓鬼の風景(『餓鬼草紙』、京都国立博物館蔵)

2) 大乘寺『五山十刹図』、東福寺『大宋諸山図』の祖本は、1247-56年中の編纂とされる。



図5 施飯餓鬼、「五百羅漢圖」(1178年、ボストン美術館蔵)

の両院ではこの礼文儀礼が修されたことから、図5はその一場面を活写したとみられる。

また、入宋僧請来の儀礼の多くが、北宋時代の江南地域で制作・重修された儀礼次第書に基づくことには留意すべきで、忌日や施餓鬼に代表される報恩・回向儀礼は、在家者と寺院(僧侶)をつなぐ重要な役割を果たした。施餓鬼日である7月15日は、道教でいう「三元」思想の中元日にあたる。「三官」の地官が人々の功罪を閲覧し処置を下す日のため、道観ではこの日に謝罪法が行われ、宋代には祖先や孤魂などの亡魂供養の日、「餓鬼」の救済日とされた³⁾。宋代道釈社会における7月15日は、遡源は別にして、「回向」「救済」を通じて、在俗信者との関係を結ぶ重要な日だった。僧侶がもっとも心身清浄な時に回向儀礼を行う理由はそこに認められるだろう。

日本僧が、新たな仏教の理想を求めた宋地では、儒仏道のそれぞれが影響し合い、回向、追福、救済儀礼を多様に展開させる時代であった。栄西が「水陸供」の重要性を述べ(『興禅護国論』八門)、俊芿が盂蘭盆会を重視し、宋式葬送儀礼を導入する背景は、大陸「最新」の儀礼文化の隆盛とその実体験に基づく。そして、こうした宋式儀礼興

行のため請来された宋本「(地藏)十王図」「羅漢図」「諸天図」「六道図」などの模写本の制作、流行は、宋式寺院で興行された回向儀礼文化が、中世日本社会に受容されていく過程を物語っている。

「泉涌寺に参学」するということ

本稿では、①「首楞嚴呪」儀礼が南宋諸寺院の通用儀礼で、日本禅律寺院で重要視される儀礼であったこと、②鎌倉時代以降に展開する盂蘭盆や忌日などの回向、報恩儀礼の流行は、入宋僧の体験に基づいた宋代仏教文化の興行とその受容に求められることをあきらかにした。

入宋僧たちの多くは、こうした宋地の〈規則〉や儀礼体験を内在すると考えてよく、帰朝後、その〈規則〉——宋代寺院のライフスタイル——に準じた造寺や宗教活動を実践するわけで、泉涌寺では新入門僧、客僧(他門僧)を問わず、入寺翌日から宋式〈規則〉に準ずることが義務づけられた(『私記』「投下章第一」)。つまり、貞慶門流(戒律)、法然門流(浄土)、栄西門流、天台僧、真言僧などが、それぞれの修学のために「泉涌寺に参学」した事実は、彼らが必然的に宋代仏教の〈規則〉や「学行」、文化を擬似体験し、退出後の彼らの一部が宋式儀礼の流行の一端を担ったことを意味している。

また、泉涌寺僧の宋地参学状況や「純粹禅」の請来者・蘭溪道隆の泉涌寺(来迎院)留錫の事実からも理解されるように、宋代仏教の〈規則〉という視点に立つと、禅寺と律寺がきわめて近い宗教環境にあることが理解される。

このように、寺院という〈場〉への着目は、従来捨象されていた〈規則〉、それにともなう僧侶の重層的交流、文化伝播という事象の再発見を導くばかりでなく、鎌倉仏教研究における学際的視座の結節点として重要な視点といえるだろう。

(泉涌寺宝物館 学芸員)

図1,2 筆者撮影

図3 東隆眞編『徹通義介禅師関係資料集』(春秋社、2008年)、p.58を転載・修正

図4 『大絵巻展』(京都国立博物館、2006年)、no.7を転載

図5 『大徳寺伝来五百羅漢図』(思文閣出版、2014年)、B10(p.101)を転載

3) 松本浩一「中元節の成立について」(『改革・変革と中国文化、社会、民族』、日本評論社、2008年)。

日本所在漢籍に見える東アジア典籍流伝の歴史的研究 —宮内庁書陵部蔵漢籍の伝来調査を中心として—

高橋 智

採択課題：日本所在漢籍に見える東アジア典籍流伝の
歴史的研究—宮内庁書陵部蔵漢籍の伝来調
査を中心として— (H26～H27)

申請者 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
教授 高橋 智

第1章 蔵書文化の開拓

日本所在漢籍に見える東アジア典籍流伝の歴史的研究—宮内庁書陵部蔵漢籍の伝来調査を中心として—、このテーマで共同研究を始めたのは、宮内庁書陵部所蔵漢籍の伝来調査によって、日本の伝統的蔵書文化の特徴を明瞭に把握することができると考えたからです。伝来単位の蔵書構成を解明することは、漢籍文化がどのように我が国に浸透し発展してきたかを理解する有力な研究方法の一つであることを共同研究者が共通して認識しているのです。

さて、こうした研究の発信元とはいえ、それは中国の伝統的な文献学にあります。民国25年(1936)に商務印書館から出版された陳登原著『古今典籍聚散考』は、古籍流伝の研究に貢献するものとして注目をあびました。著者は自ら「中国典籍史」と本書を位置付けていますが、書物の蒐集と存亡の歴史を概括分析した画期的な研究でありました。「政治」「兵燹」「蔵弃」「人事」の四つの項目にわけて典籍の歴史を体系化したのです。それは、秦の焚書から『四庫全書』の纂集、董卓の乱から太平天国の乱などの戦乱による亡逸、蔵書家の歴史やその特徴、人災や保管など人と書物とのありかたを系統的に総括したのです。そして、その後、書物聚散の場所を基礎とする蔵書史研究が、宮中を中心とするものと民間を中心とするものとの二つの区分をもって行われるようになったのです。

古来、中国の典籍集散の中心は宮中にありました。『漢書藝文志』の基となった『七略』の編纂が宮中で行われて以来、歴代の王朝は戦乱のたびに蔵書の再生を企て、宮中は鈔写や出版機構としての役割も担っていきました。明代中期以降は、宋・元時代の書物も稀少価値を持つようになり、民間の蔵書家が活躍するようになりました。その蔵書は質量ともに宮中を凌ぐものでした。その民間蔵書家研究の嚆矢ともいえる『蔵書紀事詩』7巻は蘇州の葉昌熾(1848～1917)が著わしたものでした。その後、東莞の倫明(1875～1944)は民国24年(1935年)『辛亥以来蔵書紀事詩』を著し、続いて、蘇州の王謩(1888～1969)は、『続補蔵書紀事詩』を、周退密・宋路霞は『上海近代蔵書紀事詩』を、徐信符は『広東蔵書紀事詩』を著わしました。葉氏以来、

延べで一千数百人にも上る蔵書家の事績が伝えられます。それ以後は『江浙蔵書家史略』(呉晗)『中国蔵書家考略』(楊立誠・金步瀛編)など枚挙にいとまがありません。最近では、『中国蔵書通史』(傅璇琮等主編)が決定版と言えましょう。1999年には、齊魯書社が『蔵書家』という専門雑誌を発刊、現在に至っています。この様な蔵書文化研究はまた、図書館史研究とも密接に関わります。『中国古代蔵書与近代図書館史料』(李希泌等・1982 中華書局)はこの研究の嚆矢で、『中国蔵書楼』(任繼愈編・2001 遼寧人民出版社)は、この研究をたすける内容となっています。

蔵書文化の開拓は、おおよそこのように中国でなされて参りましたが、漢籍受容を基盤とする日本の伝統的典籍文化も、この中国のように整理されることによって、一層理解が深まると言えるでしょう。

その蔵書文化を整理する基礎作業こそが、一つ一つの原本を丁寧に書誌調査することにあるわけです。書誌調査は原本のいろいろな面での価値を明らかにする地道な作業ですが、書物の成立には様々な地方性、様々な収蔵機関や来歴の理解が原点となります。例えば中国国家図書館蔵の孤本、宋蜀刻『王摩詰文集』は北宋末から南宋初年にかけて四川で開板され、明・項元汴の蔵になり、清・汪士鐘・楊紹和の蔵書となり、北京図書館に入蔵した経緯があります。こうした一書の蔵書史はこれを体系化した研究はありません。古典籍のテキスト的価値はしばしばそれが収蔵された経緯によって大いに評価が変わりますし、中国の書物文化ではその経緯こそが、非常に大きな価値と意義を有しているのです。

そこで、この研究を遂行するのに必要不可欠な知識とは一体何でありましょうか。蔵書史の把握、それと、蔵書研究のもっとも有力な拠り所である蔵書印の研究です。中国では完全な蔵書印譜はありませんが、林申清編『明清蔵書家印鑑』『明清著名蔵書家・蔵書印』『中国蔵書家印鑑』の三書が便利なものです。『中国国家図書館古籍蔵書印選編』(孫学雷等・2004 線装書局)や『中国古籍稿鈔校本図録』(陳先行等・2000 上海書店)も有効です。

さて、以上のような中国の蔵書文化を鑑みると、日本の

蔵書文化を整理把握し、日本における漢籍蔵書文化というテーマも極めて意味あることであると思われるのです。

第2章 日本における漢籍流伝

おおまかに言って、日本の漢籍受容には5段階の改変がありました。漢字文献の流入、仏教文献の流入、印刷術の伝播、宋刻本の流入、朱子学の伝来です。これは蔵書文化と深く関わってくる要素なのです。

3世紀に朝鮮を通じて『論語』『千字文』が伝えられたことは周知のことです。6世紀には仏教が伝わり、書写文献が増えてまいります。770年に完成した『百万塔陀羅尼』は、中国から伝来した印刷術がもたらした成果の一つです。その後、印刷と書写文献が、仏典を中心として更に増加していきます。蔵書も含めその主体は寺院でした。奈良では興福寺を中心として春日版を刊刻、学僧は大陸から写本を多数伝来して寺院に蓄えました。そして齋然が北宋から大蔵経を将来したと言われるように、大陸の宋刊本が流入し、出版事業も蔵書事業も次第に宋版を中心となしてゆくようになります。寺院だけでなく貴族にも宋版が珍重されます。博士家清原家、京都の寺院、有力な武士が宋版の流入とともに日本の蔵書の中心となっていきます。五山の蔵書はその最も盛んな側面です。そして武士の台頭とともに北條実時の金沢文庫は珠玉の蔵書を誇りました。室町時代はまだ大陸から将来される宋・元版に刺激されてこの三層の人々が蔵書文化を担っていきました。すでにこの頃から宋学のテキストも流入すると、古注学を標榜していた博士家にも変化が現れ、近世の初期には宋学による受容と朝鮮の活字印刷があいまって、古活字版があらわれます。こうして蔵書の主流は武家へと移っていきます。その代表が徳川家です。江戸時代になると宋・元版は輸入されませんが、明・清版はおびただしく流入しその翻刻本である和刻本が一世を風靡します。蔵書は大家と藩校が活発となり、江戸幕府の昌平坂学問所は、新渡来の明・清刊本を中心に、中世までに渡来した宋・元版を再収集して一大蔵書機構となりました。江戸後期には再び中世の古鈔本や宋・元版の発掘を行う考証学が勃興し、西洋化の波が押し寄せる明治時代につながっていきます。江戸時代までの蔵書は一端精算されて新たな機構の所蔵になるものもありますが、多くは散逸し、大正時代以降の新興の財閥による新たな蔵書家の誕生とともに再収集が繰り返され現在に至っています。

第3章 宮内庁書陵部の蔵書源流

以上の歴史を踏まえて、現存の漢籍の蔵書から、古来の蔵書文化を復元してみようと考えたわけです。そこで、日本で最も歴史と内実ある宮内庁書陵部の蔵書を綿密に調査することでこの復元の最も大きな入り口を入ろうというわけ

です。書陵部の蔵書は中世博士家、三条西家等公家、東福寺を始めとする古刹、日典や大通等の積家、更に金沢文庫・足利学校を中心とする学塾、徳川家康以来の駿河御讓本・昌平坂学問所、毛利高標・市橋長昭等の大名武家の蔵書史を有機的な流動史として捉えることができます。そこでアプローチの要となるのは蔵書印などによって、旧蔵書にどんなものがあるのかを知ることです。その蔵書の傾向から様々な文化を想像・再構築することができるのです。私たちは、宮内庁書陵部本の書誌調査をもとに、漢籍蔵書文化の概略を把握する調査を、それぞれ協力者を得て調査を進めています。そして、いくつかの代表的な蔵書単位について、簡略紹介と旧蔵書リストを作製し、これをデータベース化する試みを行っています。

例えば、南禅寺と昌平坂学問所を例に挙げてみましょう。

【名称】：南禅寺（金地院、大寧院）

【所在】：所在地 京都市左京区南禅寺福地町

蔵書所在地 上記並に各所に散在

【簡略紹介】：

全称を瑞龍山太平興国南禅禅寺という。龜山天皇がその離宮を改め、無関玄悟を開山として正応4年（1291）に建立した寺院で、はじめ禅林寺と称したが、間もなく示寂した無関に代わり、第2世の規庵祖円の下で伽藍を造営、永仁元年（1293）に完成し、寺名も南禅寺と改めた。禅宗に帰依した天皇が寺領を寄進し、広く禅林の人材を登庸する制度を定めたことから、官刹として高い寺格が与えられ、南北朝時代までに五山第一、さらには五山之上と位置付けられた。爾来、五山禅林の僧は南禅寺住持を最高位とする。

来朝僧の一山一寧や竺仙梵僊も止住し、大陸の学藝を移植する窓口となった。当山公用の南禅寺一切経は、天平時代の写経、北宋時代刊行の開宝蔵本や、初雕本高麗版蔵經本を含むことから、日本国の重要文化財に指定される。

（大寧院）

南禅寺第53世、伯英徳儒の塔所。伯英は臨済宗大覚派の南北朝時代の僧。武蔵の出身で鎌倉建長寺の了堂素安に学び、貞治年間（1362-7）に入元、元明交替期に寧波天童寺の了堂惟一に就き、永和2年（1376）に帰朝した。建長寺第60世を務めた後、京都に移って、応永2年（1395）南禅寺住持の位に昇った。その後、大寧院を開いて居住し同院に示寂した。

（金地院）

はじめ南禅寺第68世の大業徳基が鷹峯に開いたとされる寺院で、同270世の以心崇伝が南禅寺内に再興した。以心は永禄12年（1569）の生まれ、室町幕府を支えた一色氏の出身で、同266世の玄圃霊三、262世の靖叔徳林の下で学び、臨済宗大覚派の流れを汲む靖叔に嗣法した。慶長10年（1605）南禅寺に昇住。同13年、徳川家康の招きで

駿府に赴き、同 15 年には同地に金地院を開創、幕政のうち、外交や寺院制度を中心に、広く諮問に応じた。五山禅林を人事の面で統括する僧録司の任を得て、将軍の下問にも応じる必要から、元和 5 年（1619）には江戸城近くにも同院を開く。寛永 4 年（1627）に京都金地院の改装を遂げ、同 10 年に示寂した。本光国師と号す。

金地院と僧録司の職は最嶽元良に引き継がれ、この間、駿府の地所は返上、江戸の金地院は同 15 年に増上寺附近の現在地（東京都港区芝公園 3 丁目）に移された。以心が家康の求書活動に協力し、院や門跡寺院、公家衆、五山衆から稀観書を集め、特に五山を統括する立場に就いたことから、禅籍の善本が同院に蓄積された。

【蔵書の来源】：

経論の他、本寺に止住した帰朝僧の将来書や、五山版等の図書が集まり、特に金地院では、広く京都五山の蔵書が集約され、善本が伝えられた。

【蔵書の現状】：

南禅寺一切経等の文化財は現在も南禅寺に在る。金地院蔵書中の禅籍の善本は、明治期に内閣記録局に収められ、明治 23 年（1890）に宮内省図書寮に移されたが、その他にも広く流失して各所に散在する。

【参考資料】：

桜井景雄『南禅寺史』（大本山南禅寺、1940、54）
玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（講談社、1983）
上田純一『京都金地院公文帳』（八木書店、2007）

【図書寮文庫の蔵書】：

（大寧院）

雲中奏議 明刊 4 冊 402-35

（金地院）

大学中庸朱子或問 元刊 2 冊 555-128

増注唐賢絶句三体詩法 室町明応 3 年（1494）刊 1 冊
556-141 覆元

冷斎夜話 南北朝刊 1 冊 556-46

金剛般若波羅蜜經注解 南北朝刊 臨川寺版 1 冊 556-94 聯燈会要 元刊 10 冊 506-41

僧宝正統伝 室町刊 1 冊 556-73

慈受深和尚陞堂頌古上 宋刊 1 冊 556-78

黄梅東山語録 宋刊 1 冊 556-74

正法眼蔵 宋刊 3 冊 556-70

禅宗頌古聯珠通集 宋刊 7 冊 556-61

古尊宿語録 宋刊 9 冊 556-62

入衆須知 元刊 1 冊 556-95

蘭溪和尚語録 鎌倉刊 3 冊 556-77

応庵和尚語録 鎌倉刊 2 冊 556-76

密庵禅師語録 南北朝刊 1 冊 556-72

雪峰空和尚外集 南北朝刊 臨川寺版 1 冊 556-93

開福寧禅師語録 南北朝刊 1 冊 556-75

破庵語録 南北朝刊 臨川寺版 1 冊 556-87

大川語録 室町刊 覆宋 1 冊 556-96

偃溪和尚語録 室町刊 覆宋 1 冊 556-69

月江和尚語録 室町刊 2 冊 556-64

【蔵印】：

「大寧院」「金地院」

（文責・住吉朋彦）

【名称】：昌平坂学問所

【所在】：旧所在地 東京都文京区湯島 1-4-25

（史跡 湯島聖堂）

蔵書所在地 東京都千代田区北の丸公園 3-2

（国立公文書館）

【簡略紹介】：

寛永 7 年（1630）林羅山が上野忍岡に開いた幕府儒官林家の私塾が、元禄 3 年（1609）、五代将軍徳川綱吉の文教振興政策により湯島に移転拡充し、寛政 9 年（1797）、幕府の官学となって「学問所」と称された。同 11 年（1799）からは稀観漢籍の和刻（官版）が始まり、慶応 3 年（1867）まで約 200 種を刊行、その板木を保管し、必要に応じて民間の版元にも貸し出した。文化年間（1804-17）以降は御実紀調所・地誌調所・沿革調所の三史局を開設し、歴史地理に関する調査および編纂に必要な資料を収集、さらに天保の改革以降は本屋仲間解散に伴い、出版物の事前審査を行ったため、その対象となった書物も集められた。明治維新後は、教育組織としては後の東京帝国大学に、蔵書は書籍館・浅草文庫等を経て太政官文庫（のち内閣文庫）に継承された。

【蔵書の来源】：

林家歴代の収集に係る漢籍のほか、上記三史局収集の国書、出版事前審査用の漢籍・国書がある。漢籍については、学問所時代に木村兼葭堂旧蔵書、市橋長昭蔵書が献納されて一層の充実を見た。

【蔵書の現状】：

幕末当時約 9 万 5 千冊あったとされる蔵書のうち、約 8 万 8 千冊が国立公文書館内閣文庫に現存する。図書寮文庫蔵書は、紅葉山文庫・医学所等、幕府関係機関から内閣文庫に集積された蔵書のうち貴重書を明治 20 年代に移管した際に来たものである。三史局関係の蔵書は民間にも流失しており、西尾市岩瀬文庫などに多数見られる。

【参考資料】：

『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』（国立公文書館、1969 初版、1981 改訂版）

福井保『内閣文庫書誌の研究』（日本書誌学大系 12、青裳堂書店、1980）

福井保『江戸幕府編纂物』（雄松堂書店、1983）

福井保『江戸幕府刊行物』（雄松堂書店、1985）

内閣文庫編『内閣文庫百年史 増補版』（汲古書院、1986）

長澤孝三『幕府のふみくら 内閣文庫のはなし』（吉川弘文館、2012）

【図書寮文庫の蔵書】：

周易伝義 元版 5冊 401-14

周易本義附録集注 元大徳7年（1303）張氏可軒書院刊
5冊 554-28

呂氏家塾読詩記 宋刊 6冊 401-19

詩童子問 元至正4年（1344）余氏勤有堂刊 10冊
554-27 文安4年（1447）識語

詩集伝音釈 元版 4冊 554-26

春秋胡氏伝纂疏 元刊 32冊 554-31

春秋諸伝会通 元至正11年（1351）崇川書府（虞氏明復齋）
刊 15冊 554-29

附音傍訓晦庵論語句解 元刊 1冊 401-20

孟子集注 元刊 7冊 554-30 応永9年（1402）識語
東坡集 宋版 17冊 404-59

王状元集百家注分類東坡先生集 宋刊 13冊 404-62

集千家註分類杜工部詩 元至正7年（1347）圭山書院刊
10冊

游宦紀聞 宋臨安書棚刊 2冊 403-57

爾雅注疏 宋刊 5冊 401-31

新編四六必用方輿勝覧 宋刊 30冊 402-84

新編方輿勝覧 宋版 26冊 402-91

錦繡万花谷 宋版 1冊 403-58

画一元龜 宋版 18冊 403-60

黄帝内経素問注證発微 慶長十三年刊 12冊 403-93

黄帝内経素問注證発微 慶長十四年刊 6冊 403-87

難経本義 元和刊覆古活 2冊 403-108

素問入式運氣論奥 慶長16年刊 1冊 403-86

新編名方類證医書大全 大永刊 阿佐井野版 9冊 403-
75

格致余論 慶長刊 木活 1冊 403-91

【蔵印】：

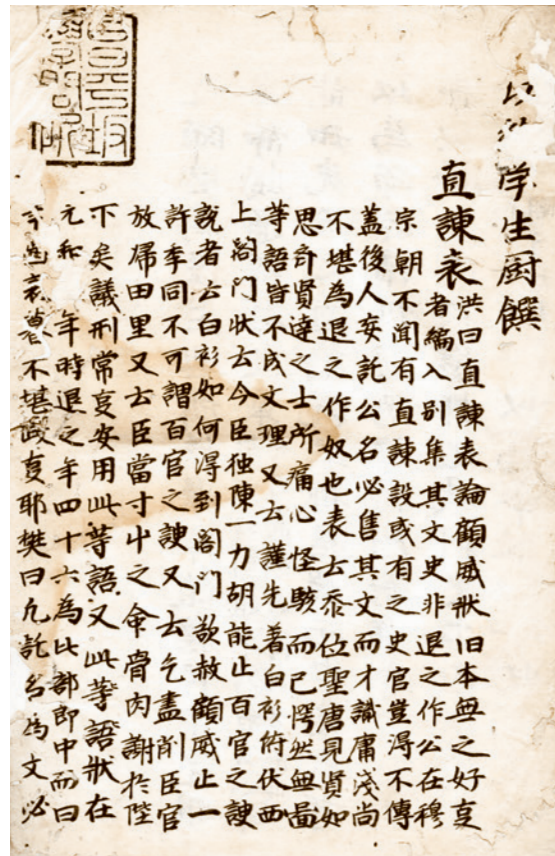
「昌平坂/学問所」「番外書冊」「学問所改」ほか、年号干支
の四文字（受入の年を示すもの）の印が多数ある。

（文責・堀川貴司）

第4章 日本全国漢籍蔵書の源流

こうした調査の取り組みが、全国の漢籍所蔵機関について行われるようになると、おそらく、日本にも中国のような蔵書通志、また源流と流伝の研究成果が次々と現れてくるのではないかと思います。この書陵部を中心とした調査がそのきっかけとなればと願います。東洋文化研究所附属東洋学情報センター主催「漢籍整理長期研修会」に参加される全国の漢籍整理担当者が、それぞれの担当館所蔵漢籍の蔵書源流を認識していただくための蔵書史データ（蔵書印や蔵書単位の解説等）となれば、と考えているのです。

（慶応義塾大学附属研究所斯道文庫 教授）



表紙『昌黎先生集』1冊の最後の頁。ここに昌平坂学問所の印が捺されていますので、もともと不全本であったようです。その後、本書は学問所から民間に流出したのですが、こうした例の如く、蔵書印は、蔵書文化を担った文庫の旧蔵書復元に有力な資料となります。

『広島大学文学部舊藏漢籍目録』の刊行

赤迫 照子

採択課題：広島大学文学部旧蔵漢籍目録作成のための研究 (H26～H27)

申請者 宇部工業高等専門学校 准教授 赤迫 照子

はじめに

日本の中古文学を専門分野とする私が漢籍目録作成に携わるようになった経緯は、『明日の東洋学』No.29掲載の拙稿「漢籍整理長期研修を礎に―「広島大学所蔵漢籍目録」への挑戦―」(平成25年3月)で述べた。ご縁あって平成19年度に広島大学図書館研究開発室に着任し、図書館所蔵の特殊コレクションの整理を担当することになった私は、無謀にも、文学部旧蔵漢籍の整理に挑んでしまった。漢籍を書誌調査するための知識やスキルを学び、漢籍整理に取り組む続ける好運に恵まれ、そしてこの度、大木康教授(東京大学東洋文化研究所)・富永一登教授(現:安田女子大学)・野間文史教授(現:二松学舎大学特別招聘教授)との共同研究というかたちで、成果物を『広島大学文学部舊藏漢籍目録』として刊行する目途がついた。今日までの約8年間、御支援くださった関係者の皆様に、心より御礼申し上げたい。

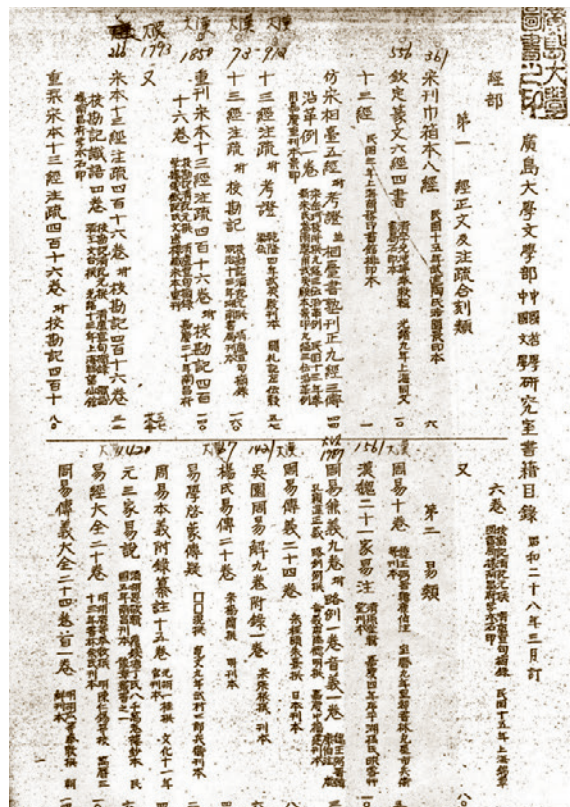
冊子目録の刊行

この共同研究には目的が二つあった。一つ目は冊子目録の刊行によって広島大学文学部が長年蒐集してきた漢籍の情報を広め、学術研究に貢献することである。

様々なところで繰り返したが、広島大学は漢籍に限らず、和本や図書資料の目録作成・週及入力が大幅に遅れていた。背景には原爆による罹災の混乱と、その影響を前身校9校が引きずったままに広島大学が創立されたこと、そのままで約40年も続いたキャンパス及び学部統合移転の問題がある。「それでも何とか整理を進めなければ」ということで、広島大学図書館に研究開発室が設置された。文学研究科出身であった私は着任した直後に、ガリ版刷の冊子目録『広島大学文学部中国哲学中国文学蔵書目録』(昭和28年訂)を見つけ、「これがあるのだから、文学部旧蔵分の漢籍の一部は書誌確認できるのでは」と思い立ったのである。しかしすぐに、「これはきちんと勉強しなければ」と慌てて東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センター主催の漢籍整理長期研修を受講した。この研修によって漢籍整理が大幅に進んだことや、富永教授・野間教授(当時、広島大学文学研究科)の御指導と大木教授の激励によって冊子目録作成へと繋がったことを、前掲の拙稿(『明日の東洋学』No.29)で記したその後、私は平成25年春に山

口県の宇部工業高等専門学校に転出した。目録原稿は大体できていたものの、四部分類による排架は完了していなかった。それに、念のため目録原稿の書誌情報と現物を再度、照合しておきたいと思っていた。「さて、これからどうしたものか」と悩んでいたところ、思いがけず大木教授の御尽力をいただき、共同研究として申請する機会に恵まれた。

平成26年度はとにかく目録原稿の完成を目指し、平成27年度は冊子目録刊行への準備をした。広島大学を離れた私の代わりに、広島大学図書館長の富永教授(当時)が時にはお一人で、時にはアルバイトの大学院生達と共に、着実に作業を進めてくださった。平成26年度の共同研究費の大半は、このアルバイトの人件費に充てている。文学研究科で中国文学を学ぶ大学院生達にとって、線装本に直接触れるこの実地調査は、非常に良い経験になったと思う。



広島大学文学部中国哲学中国文学蔵書目録

集部は何となく解るので作業が早いのだが、経史子にはなかなか歯が立たず、苦しんでいたようである。研究者を志す大学院生が書誌調査の機会を得ることができたのも、この共同研究の成果の一つであった。

私は可能な限り、排架と照合作業に立ち会いながら、目録原稿の訂正と排列の再検討に取り組み、版下となる原稿の完成を目指した。排列は、時間が許す限り練り直した。研修でも御指導いただいた東文研の橋本秀美准教授が「初心者向け四部分類解説」（東京大学東洋文化研究所図書室編『はじめての漢籍』汲古書院 平成23年）にて、四部分類といっても所蔵機関によって「分類法の実体は千差万別」で「その実態は全くいいかげんなもの」と述べられているが、その「いいかげん」を如何にして「広島大学文学部らしさ」に着地させるか、大変苦しんだ。排列の再検討といっても、私自身が排列を考えたのではなく、富永教授や野間教授が「これがこっちで、次はこうで、こうなって…」と目録データを次々に指しながら説明されるのを、必死に書きとるような作業であった。東文研や京都大学人文科学研究所の冊子目録の排列と見比べつつ、「広島大学の蔵書体系であれば、この排列だろうか」と試みたものを両教授にお見せしては、「それで良いです」「違う、違う」と御指導いただく繰り返しだったのである。苦しみはしたが、広島大学の学統というものを実感できる、贅沢な時間であった。

平成26年度末に富永教授が御定年を迎えられるまでに何とか排架も終了し、図書館職員の方々によって書架に分類見出しも掲げられて、漢籍の現物利用が可能になった。図書館所蔵漢籍のほとんどは和装資料室に排架しているが、一部の貴重本は貴重資料室に別置している。まだ文学部所蔵の漢籍も数点存するが、どれがどこにあるかは把握できている。例えば、明刊本「古詩歸十五卷」は佐藤利行教授の、細野燕台翁旧蔵「初刻拍案驚奇三十九卷」は川島優子准教授の研究室所蔵といった具合である。

蔵書について、少し触れておきたい。経部子部と、史部の金石類は中国哲学研究室が蒐集したものが基本となっている。金石類以外の史部は東洋史学研究室、集部は中国語学文学研究室である。子部釋家類や集部には僅かに、国語学国文学研究室蒐集の本も存する。

鈔本は少ない。明代としいものは、思い切って「明刊本」と目録に明記した。松平定信旧蔵「四書人物典圖全考十六卷」や「文選纂註評林十二卷」等、約20点存する。蔵書印はできるだけ確認し、目録に記した。著名な蔵書家岡田眞・内野蛟亭・小津桂窓をはじめ、徳川家の侍医曲直瀬正琳一族の「養安院蔵書」、長崎奉行中川忠英の「中川家蔵書印」等日本人の蔵書印を中心に、判読できたものは明記した。他機関所蔵の漢籍との関わりも見出せた。野間教授が「加藤常賢先生「維軒文庫」」（『季報』No.89 二松学舎大学附属図書館 平成26年7月）にて気付きを記されて



漢籍整理の様子

おり、大木教授も宮内庁書陵部所蔵の某本と繋がりのある本を確認された。

今後、冊子目録が専門の研究者に活用され、広島大学文学部旧蔵漢籍を利用した研究が進むことを、大いに期待したい。

漢籍整理の普及と促進を目指して

本研究の目的の二つ目は、漢籍目録作成の必要性を国内諸機関、特に地方の図書館関係者に伝え、漢籍整理の普及と促進を図ることである。『広島大学文学部舊蔵漢籍目録』の刊行は広島大学旧蔵漢籍への評価のみならず、申請者が受講した東文研附属東洋学研究情報センター主催漢籍整理長期研修への再評価にもなる。できるだけ多くの人に漢籍目録について知ってもらうために、「どのようにして今日まで至ったか」を具体的に、わかりやすく伝えることを試みた。

和本であれば、長年、国文学研究資料館が調査収集事業に取り組んでおり、全国の調査員が大学・図書館・文庫・寺社等に赴いて書誌調査を続けている。一方、漢籍の場合はそのように常時、組織的に調査活動がされている訳ではない。それに、日常の業務に追われ、かつ、アウトソーシングが進む図書館の現場では、特別に予算化される機会がなければ、司書が漢籍整理に取り組むのは難しい。漢籍に限らず、目録作成がなかなか日の当たらない仕事になっている現状において、おこがましいが、私自身の経験と、私が頂戴したご縁を語り伝えることで、何かの役に立たないかと思ったのであった。

まず、平成26年度西日本図書館学会春季研究発表会にて「広島大学所蔵漢籍目録作成への過程－目録の仕事を継承していくために－」（平成26年6月 於サンメッセ鳥栖）と題して、発表を行った。公共・大学・小中高の図書館勤務の司書の方々、それに何より、司書を目指す大学生達に

向けて漢籍目録を説明する機会を得られたのは幸いであった。本発表で特に強調したのは、漢籍を取り巻く現状である。発表レジュメには野間教授の「〔広島大学所蔵漢籍目録 経部〕簡介」(『東洋古典学研究』第31集 東洋古典学研究会 平成23年5月)を引用し、近年、投機目的で日本国内の漢籍が中国から買い付けられていることを紹介した。なお、本発表をまとめた「広島大学所蔵漢籍目録作成への過程」(『図書館学』第105号 西日本図書館学会 平成26年9月)では、『はじめての漢籍』の大木教授による「漢籍とは？」から、日本では「学問＝漢籍を読むこと」であった長い歴史があること、ところが残念ながら現在、漢籍への馴染みが薄くなっていることを紹介している。また、発表でも論文でも、なるべく図書館の現場に沿って、例えば漢字入力の方法や「全国漢籍データベース」登録について自身の経験を報告した。

平成26年度から講師を担当する宇部工業高等専門学校主催の市民文化サロン「くずし字で読む古典」でも、漢籍について説明をしている。くずし字解読を練習するのが主な内容だが、「古い本」そのものについてあれこれ話をする中で、四部分類や漢籍目録にも触れた。受講者は熱心に耳を傾けてくださった。

いわゆる有名大企業の重職にある方々に、漢籍目録のお話をする機会もあった。工業高等専門学校では地域産業界との連携協力の推進のために、研究活動を積極的に公開している。私も宇部高専主催の発表会や講演会に参加してポスター発表をしているが、ものづくりを基本とする企業の、特に海外での現場を経験した方々から「グローバル社会では、技術者が自国の文化を自分のことばで語ることが重要である。高専生が赤迫さんのその研究を少し知っておくだけでも、異文化と関わるための教養を育むのに、必ず繋がるはず」といったお言葉をいただいた。もしもこの共同研究が学術研究だけでなく、私の思いもよらない何かに広がっていくならば、大変嬉しく思う。

おわりに

私と漢籍の関わりは『広島大学文学部舊蔵漢籍目録』刊行で一応、一区切りついた。だが、漢籍とのご縁はこれで終わりのような気がしない。今後も、どこかで漢籍目録を作ることがあるような気がしてならない。漢籍長期研修と共同研究の恩恵に授かった私だからこそその活動を、これからずっと続けていきたいと思っている。

(宇部工業高等専門学校 一般科 准教授)

センター便り

・平成27年度漢籍整理長期研修

昭和55年度、センターの前身である東洋学文献センターから実施してきた漢籍整理長期研修は、今年で36回目となりました。前期平成27年6月8日から12日まで、後期は平成27年9月7日から11日までの計2週間実施しました。大学図書館等の職員10名が参加しました。受講後それぞれの所属機関で、研修の成果を大いに発揮し活用されることと思います。講師として、大木康センター教授、さらに所外9名の専門家にご協力いただきました。この場をかりて厚くお礼申し上げます。今後も毎年実施していく計画です。

東洋学研究情報センター運営委員会委員 (2015年度)

所外委員

大西 克也	大学院人文社会系研究科・文学部教授
岩月 純一	大学院総合文化研究科・教養学部准教授
井波 陵一	京都大学人文科学研究所教授
加藤 博	一橋大学名誉教授
加納 啓良	東京大学名誉教授
小長谷有紀	人間文化研究機構理事
宮治 昭	龍谷大学文学部特任教授
宮嶋 博史	成均館大東洋学東アジア学術院(韓国ソウル)教授

所内委員

高見澤 磨	教授	東アジア研究部門(第一) (兼)センター比較文献資料学
長澤 榮治	教授	西アジア研究部門 (兼)センター比較文献資料学
菅 豊	教授	新世代アジア研究部門

(オブザーバー)

平勢 隆郎	教授	センター造形資料学分野
板倉 聖哲	教授	東アジア研究部門(第二) (兼)センター造形資料学
大木 康	教授	センター比較文献資料学分野
名和 克郎	教授	汎アジア研究部門 (兼)センター比較文献資料学
園田 茂人	教授	新世代アジア研究部門 (兼)センターアジア社会・情報
松田 康博	教授	汎アジア研究部門 (兼)センターアジア社会・情報

センタースタッフ

高見澤 磨	(たかみざわ おさむ)	センター長
センター比較文献資料学分野	中国法研究	
長澤 榮治	(ながさわ えいじ)	副センター長
センター比較文献資料学分野	中東地域研究	
平勢 隆郎	(ひらせ たかお)	
センター造形資料学分野教授	中国史	
板倉 聖哲	(いたくら まさあき)	
センター造形資料学分野教授	東アジア絵画史	
大木 康	(おおき やすし)	
センター比較文献資料学分野	中国文学	
名和 克郎	(なわ かつお)	
センター比較文献資料学分野教授	文化人類学	
園田 茂人	(そのだ しげと)	
センターアジア社会・情報分野教授	比較社会学	
松田 康博	(まつだ やすひろ)	
センターアジア社会・情報分野教授	アジア政治外交史	

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第34号

発行日 2015年10月30日
編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
電話 03-5841-5839(直通)
FAX 03-5841-5898
E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
URL http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp

デザイン コスギ・ヤエ / 印刷 (株)ヒライ